奈良の

中世を考える(1)

—平安・鎌倉—

奈良女子大学構内遺跡
出土資料にみる

中世前期の南都

奈良女子大学

日本の歴史において中世は不可解な時代である。いや、もっと正確に言えば南北朝時代を境にして中世前期と中世後期に分けることが出来るであろうが、後期のほうは芸術文化のみならず政治社会の面においてもいわゆる「日本らしさ」が完成された時であり、今の我々になじみ深い。問題はそれらを生む母胎となった前期である。荘園制・権門体制といった難解な歴史用語を持ち出すまでもなく、その社会や政治・文化の理解に実感が伴わないことが多い。これは我々が考える以上に中世前期各地域の個性が強く複雑な様相をもっているためであろう。

奈良女子大学構内遺跡では多くの中世前期の遺構が検出されている。またそれに伴う遺物も豊富である。それらは一貫して「興福寺の西北辺」という地理的条件下にあるのだが、より細かな年代や遺構としての性格づけを与えることによって、この地域の中世前期解明にいくらかでも資することが出来ると考えている。これから紹介する成果が、考古学からする中世南都研究の一助となれば幸いである。

（中川朋香 作画）

古代の南都

都が平城京を離れてから近世奈良町までの南都は、古代の南都（9～12世紀）と中世の南都（13～16世紀）に分けられるであろう。いずれの時期にも興福寺・春日大社と東大寺の占める位置は重要であるが、特に興福寺は藤原氏の隆盛に伴ってとりわけ大きな存在となっていった。

藤原氏が、平安京より自らの氏神・氏寺に参詣する際の南都の宿所が、宿院（しゅくいん）・梨原（なしはら）・佐保殿（さほどの）である。

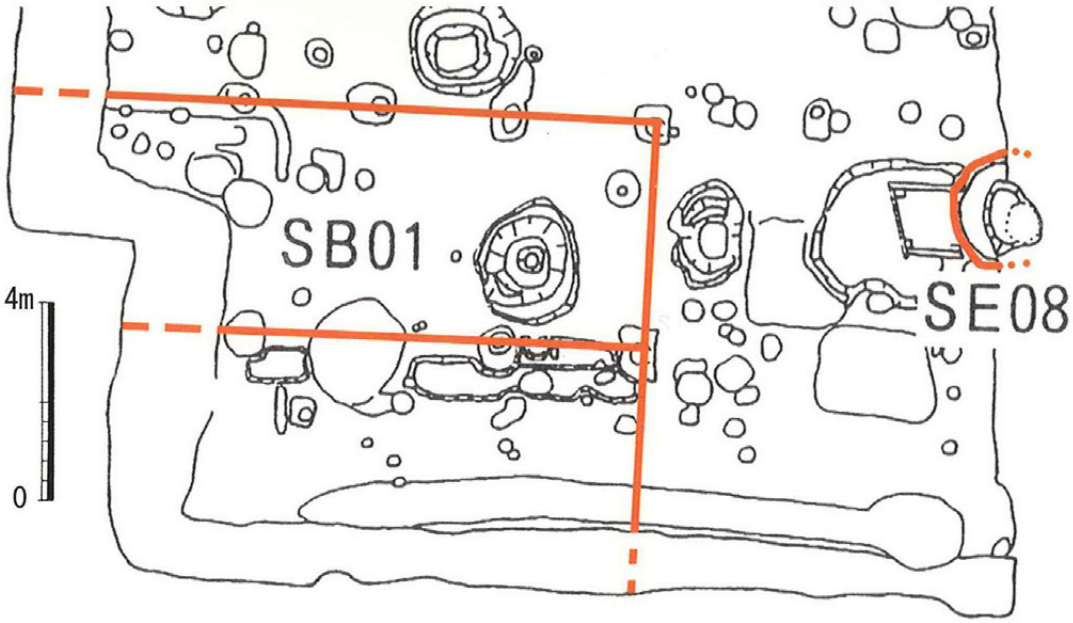
宿院はすでに『三代実録』貞観四（862）年条に見える（旧平城京内勅旨田（ちょくしでん）の賜与（しよ））が、この場合は佐保殿をも含めた藤原氏にとっての宿所の総称である可能性がある。

佐保殿は『今昔物語』によれば、その中に「不比等の御影像」があり、これを拝して寝殿に登ったということから、藤原氏の中でも高位の人々のための施設であったと考えられる。

梨原も度々記録に現われるが、興福寺旧境内北辺の発掘調査で出土した天喜六（1058）年の木簡（題籤（だいせん））に「梨原御房」とあり、興福寺の子院の一つを藤原氏が宿所として利用したのかもしれない。

▲SB01

▲SE08



10世紀の遺構（G棟）

奈良女子大学構内遺跡には、確実なものは明らかではないものの、こういった藤原氏の宿所に関わる遺構が含まれている可能性は高いと言えよう。9～12 世紀の遺構は継続的に営まれており、なかでも 10 世紀は遺物も多く、規模の大きな掘立柱建物や井戸が検出されていることは注意してよい。

中世の郷名

▲現代に残る地名▲

（★印より北を望む）

宿院御所の旧跡は、興福寺の戌亥（西北）の角なり。四辻を北行すること一丁ばかり行きて、西行くに辻あり、その奥すなはち宿院御所なり。

尋尊

（『大乗院寺社雑事記』より）

中世の南都へ

一般的に、中世は、前期(12・13世紀)と後期(14～16世紀)に分けられる。ここで扱うのは中世前期である。

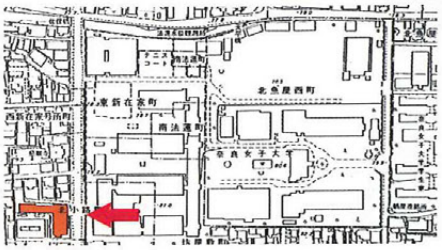
大学構内の西端、旧左京二条六坊五坪にあたる北小路町で、火災を受けて赤変した大量の瓦・壁材・土器が堆積した状態で出土した。瓦の堆積は20mはなれて東西二ヶ所あり、東側では、池(SG361)と溝(SD331)に囲まれた東西15m(南北は不明)の基壇状施設も認められた。

▲西側の瓦堆積

▲東側の瓦堆積

▲基壇状施設と池（SG361）

▲池の上の瓦の堆積



出土した軒丸瓦は巴文（二つ巴）で三通りの范があり、軒平瓦は半截花文・花菱文を中心とし、両側は不規則な均正唐草文、上下交互に配された紅葉葉 状の半截花文と連珠文である。これらの瓦の年代は平安時代末と考えられ、当時の大伽藍に使用された標準的な軒瓦よりもやや小さいので、小規模な堂宇に使われたものであろう。

さらに伴出した瓦器の年代から火災に遭ったのは 12 世紀後半であることが明らかとなった。12 世紀後半と言えば治承四（1180）年におこった平氏の南都焼討ちが想起され、この北小路町の寺院遺構もそのために焼失した可能性が高い。

これによって、「宿院」的な古代の南都は終わったのであり、兵火から復興した 13 世紀を迎えると同じ興福寺周縁部でも従来とは性格の異なる中世の南都が展開するのである。

トイレ遺構出土の木簡

中世の深く掘られた遺構としては井戸とトイレがある。井戸の枠が抜かれたものとトイレとの区別は困難であるが、構内遺跡の場合は埋土中から回虫の卵が発見されたためトイレとされた。そうしたトイレの一つから木簡が出土している。

木簡は二点あり、それぞれ下図左は長 32.9× 巾 3.1cm× 厚 0.2 ㎝、右は長 33.0× 巾 3.15cm× 厚 0.2 ㎝で、どちらも両面に字が書かれている。いずれにも一から七までの数字が見られ、これを消しているような墨痕（合点）も認められることから、番号あるいは個体数をチエックしたものであろう。注意すべきは恵経と万躰という僧職らしい人名が見えることである。しかも恵経は東大寺に所属していたらしい。このことから、この時期（13 世紀前半）には周辺が東大寺の領域であったと考えるか、あくまでも興福寺の領域で東大寺の僧が派遣されて来たと考えるか意見が分かれている。

いずれにしても、この二点の木簡は中世におけるこの地域の実像をうかがうことの出来る好資料である。

トイレ（SE3131）

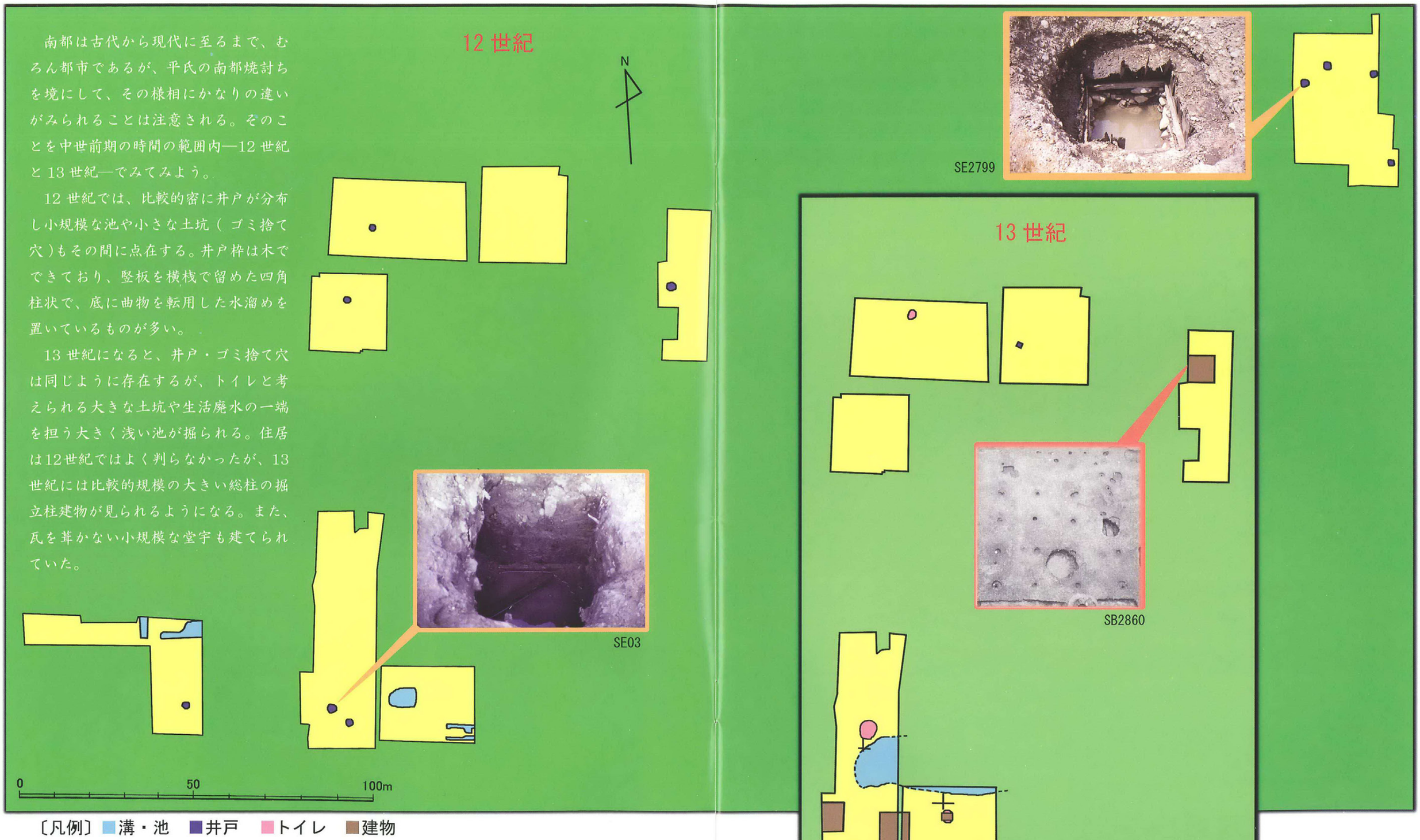
トイレ遺構出土の木簡

大きく変わった焼討ち以後

南都は古代から現代に至るまで、むろん都市であるが、平氏の南都焼討ちを境にして、その様相にかなりの違いがみられることは注意される。そのことを中世前期の時間の範囲内—12 世紀と 13 世紀—でみてみよう。

12 世紀では、比較的密に井戸が分布し小規模な池や小さな土坑（ゴミ捨て穴）もその間に点在する。井戸枠は木でできており、竪板を横桟で留めた四角柱状で、底に曲物を転用した水溜めを置いているものが多い。

13 世紀になると、井戸・ゴミ捨て穴は同じように存在するが、トイレと考えられる大きな土坑や生活廃水の一端を担う大きく浅い池が掘られる。住居は12世紀ではよく判らなかったが、13 世紀には比較的規模の大きい総柱の掘立柱建物が見られるようになる。また、瓦を葺かない小規模な堂宇も建てられていた。



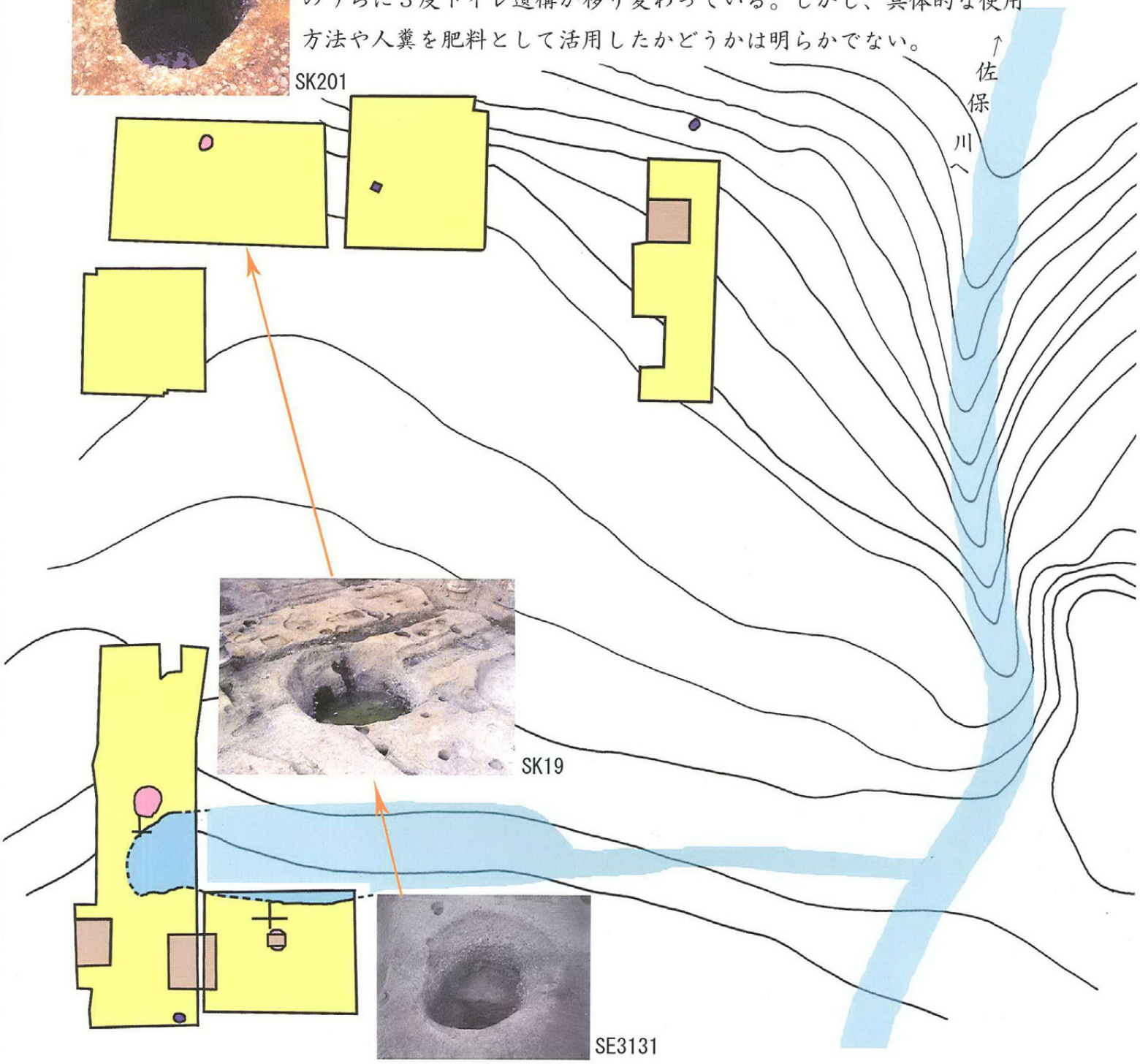
12･13 世紀の遺構配置模式図

都市生活維持のために

都市生活を営む上での課題はゴミ・上下水道・し尿処理である。ゴミはこの段階では埋めるか川に流していた。上水は、井戸から汚染されていない水が手に入ったであろう。

問題は生活廃水とし尿である。13 世紀の遺構配置に即して考えると、大きく浅い池はおそらく佐保川に流れ込む小河川に繋がっており、池に生活排水を捨てていたと考えられ、さらに、大雨などの異常出水に際しても遊水池としての役割を果たしたであろう。し尿は、それまでは溝・川に流していたであろうが、さすがに環境汚染のことを考え、大きな穴を掘って埋めるようになった。構内遺跡では13世紀のうちに3度トイレ遺構が移り変わっている。しかし、具体的な使用方法や人糞を肥料として活用したかどうかは明らかでない。

SK201



中世の建物や景観を復原してみる

発掘資料の遺構図だけでは、中世の情景は十分に伝わってこない。そこで、よく試みられるのが建物等の復原図の作成である。

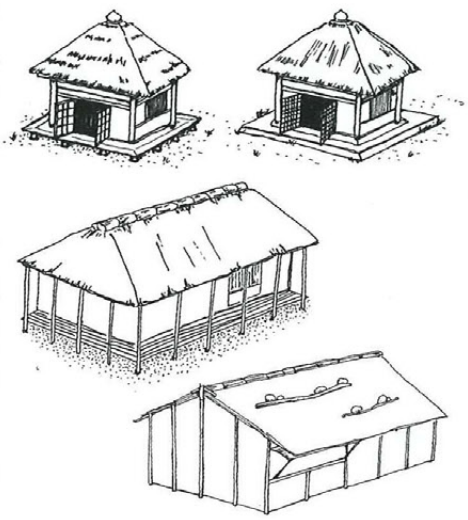
構内遺跡の13世紀の遺構についても図のような復原を行った。細い柱で藁葺き（又は板葺き）の屋根を支える大型建物（SB03）を中心に、井戸・トイレなどの生活空間が展開し、少し離れて瓦を使わない小さな堂（12世紀後半の可能性が強いが、ここでは同じ画面に入れた）も存在する。

しかし、大切なことは、このような復原があくまでも一案であり、唯一のものでないということである。可視的な画像を提供するという目的には沿うかもしれないが、いろいろな復原が可能だということを忘れてはならないであろう。

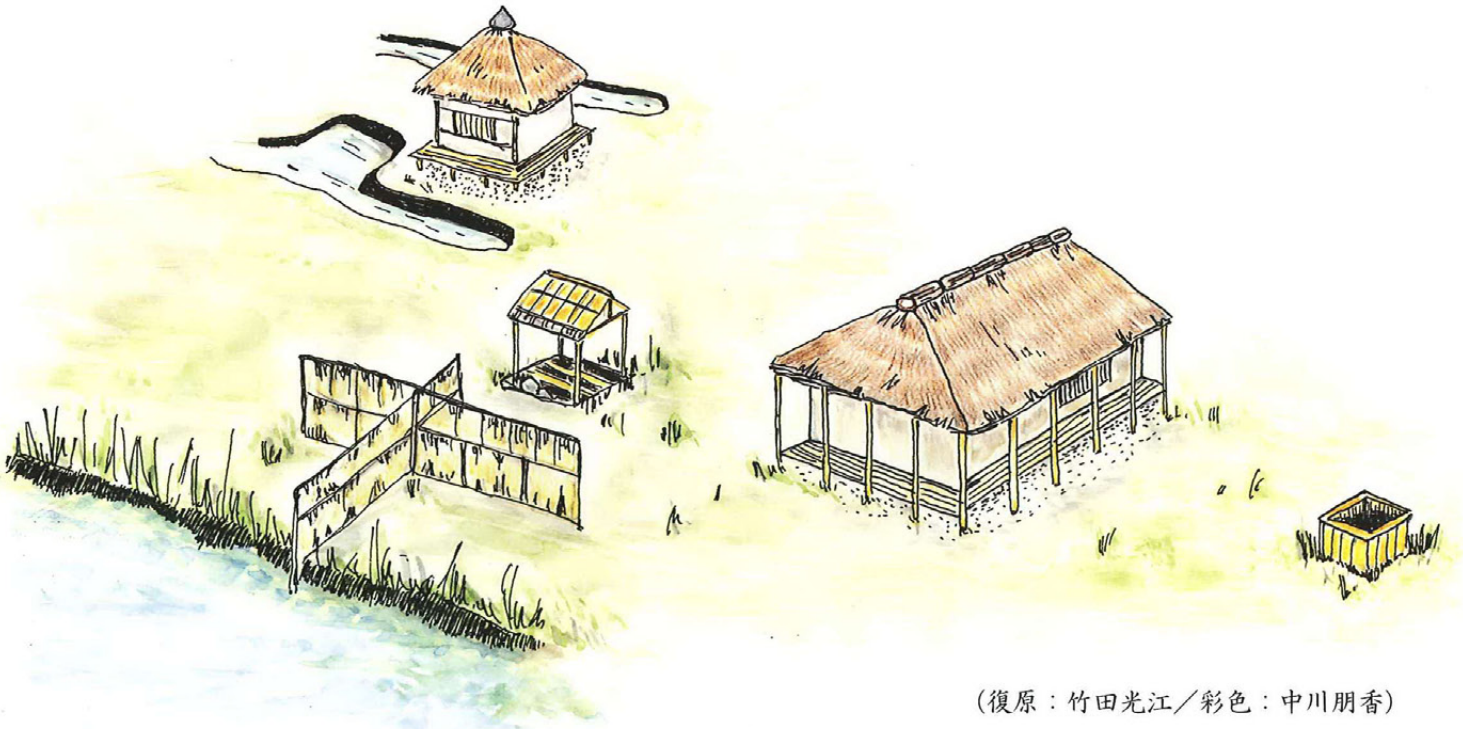
小堂は『粉河寺縁起』『一遍聖絵』に描かれており、これらをもとにした大阪市喜連東遺跡の廟堂復原図を参考にした。基本的な構造は一間四面であろうが、礎石か掘立柱か、瓦・宝珠の有無、土壁か板壁か、縁（または廂）の有無、扉の構造などといった細部になるとよく判らないことが多い。

総柱建物SB03の場合は『信貴山縁起』と『粉河寺縁起』『一遍聖絵』にこの種の建物の図が多く見られ、各中世集落遺跡の報告書などでも復原が試みられているが、やはり細部の構造までは明らかにできない。ただ瓦を使っていないことは言えそうなので、屋根は板葺きかワラ葺きとした。

このほか、トイレの具体的な構造や水系（池）との間にある十字状の柱列に関しては全く手がかりがなく、想像の域を出ない。



（復原：竹田光江）



（復原：竹田光江／彩色：中川朋香）

中世南都の日常生活

木簡の内容、そして興福寺との位置関係から、中世前期の構内遺跡には身分の低い僧侶たちと彼らに直接関わりのある集団が居住していたことが推定される。彼らの日常生活は出土遺物をもとにしてどのように復原されるのであろうか。

土器・木器から

中世の遺構から出土する土器をはじめとする日常雑器からは、部分的ではあるが当時の人々の生活の様子をうかがうことが出来る。

一般的な食器としては椀・皿があり、用途は現代と同じである。箸はすでに広く使われていた。このほか数は少ないが調理具として、おろし目のない擂鉢(すりばち)のような須恵器の捏鉢(こねばち)、暖房具としての火鉢あるいは水盤(すいばん)と考えられる瓦器盤(がきばん)などがある。

犬鹿戯画
（六車美保 作画）

食器のうつりかわり

土器のうち、食膳具（食器）は黒い器である瓦器椀と、赤い器である土師器皿に代表される。

従来、中世前期の食膳は、瓦器椀１個と大小の土師器皿１枚ずつという今日の食卓に近いものが考えられていた。ところが、少なくとも椀が２個（飯椀（めしわん）・汁椀（しるわん））必要であり、皿も食事の目的に応じてその数や大きさを変えていたことが考えられる。

中世前期の食膳（復原）

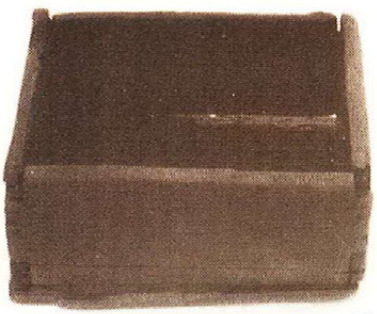
こういった食器のあり方は、本来は平安京の上級貴族たちの独占物であったが、その中心は木器（漆器）を多く含んでいた。しかし、中世前期の古い段階では、木器はそれより下の階層には普及せず、彼らの食膳習慣の拡大を支えたのは、瓦器椀と土師器皿であったといえる。食膳具としての木器が普及を見せるのは、13 世紀後半になってからであった。

13 世紀後半の漆器

木製品は、漆器椀と下駄が比較的多い。漆を塗った容器は縄文時代からあるが、日常雑器の椀としては、中世前期の南都ではそれほど普及していなかったようである。

下駄

枡は、旧左京二条七坊三坪の 11 世紀末の井戸から出土した。本格的な方形枡としては、平安京右京五条二坊九町出土のもの（9世紀後半）と並んで最も古い出土例となる。



枡

（中川朋香 作画）

他地域との交流

構内遺跡で出土した中世前期の土器には、土師器皿や瓦器椀といった在地で生産された土器のほかに、東海や東播磨で生産された土器ももたらされている。

東播(とうばん)系須恵器は、現在の神戸市西部から明石市にかけての地域で生産された。11～14世紀前半にかけて、椀、捏鉢、丸底甕などの日常雑器類を焼き、13世紀以降は捏鉢と甕を専業的に大量に焼いた。特に捏鉢は、近畿一帯にもたらされていたようである。

東播系須恵器捏鉢

一方、東海系の土器には、常滑焼（知多窯）甕と、わずかながら知多窯の片口鉢、知多・東濃産の山茶碗、瀬戸の山茶碗窯で併焼される入子(いれこ)が出土している。なかでも、12世紀中頃から生産され始めた常滑焼甕は、12世紀後半には畿内にもたらされ、13世紀中頃には近畿のみならず西国一帯に多くみられる製品である。　（瀧田雪江）

中国との交易

中世の日常雑器の中に混じって、少量ではあるが、中国から輸入された青磁・白磁・影青（青白磁）が見られる。黒っぽい瓦器や赤褐色系統の土師器皿の間では、光沢のある磁器の白や青緑はひときわ目をひいたに違いない。

中国の陶磁器はすでに奈良時代の都や寺院・地方官衙などで使用されていたが、日常雑器の中に散見されるようになるのは中世になってからである。

青磁の産地は最初は浙江省の龍泉窯であったが、のちに福建省同安窯など沿岸部に沿って南のほうに拡がっていった。白磁は広西省の景徳鎮窯を中心に南方に拡がっていった。また、明以後になると白地に呉須（酸化コバルトを主成分とする彩料）で文様を描いた染付が考案され、やはり今度は 15 世紀の日本にかなりの量がもたらされるようになる。

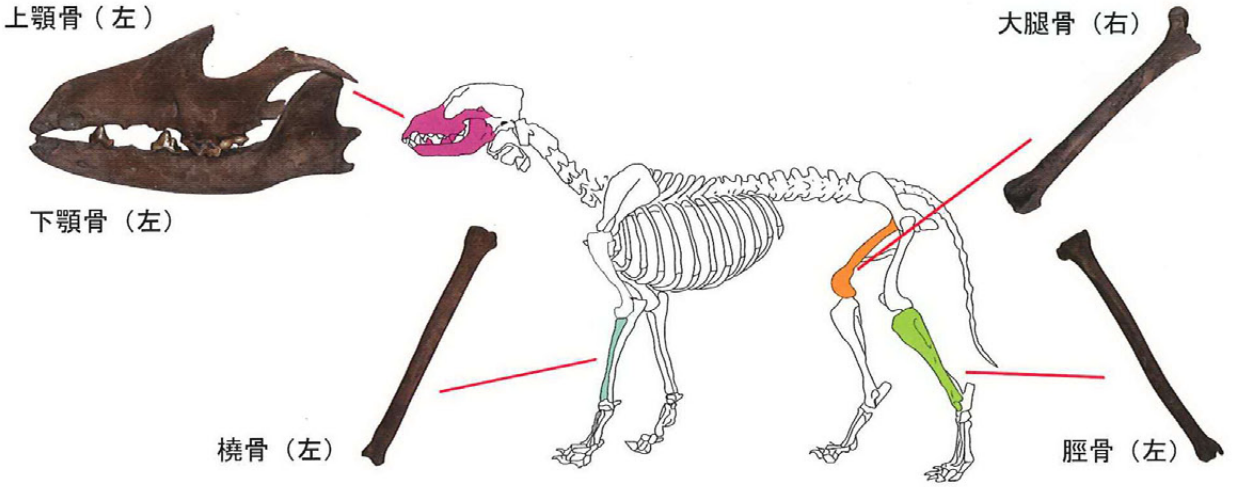
また、中国から輸入された焼物には、磁器だけではなく陶器もある。盤と壺が多いが、盤は黄色の地に茶色で文様が描かれ（黄釉盤）、壺は茶褐色に施釉された４方向に把手を持つもの（四耳壷）が多い。

一般的に中世前期には、食膳用の土師器皿・瓦器椀、調理具としての捏鉢、そして貯蔵容器としての甕という基本的な土器様式があった。そのなかで、畿内中心部に関しては、捏鉢は東播系須恵器、甕は常滑焼甕で補完していた。こうしたことから、古代よりも広域でより活発な流通のあり方をうかがうことができる。

犬の骨をめぐって

13世紀後半のトイレ遺構SK201から犬の骨がまとまった状態で出土している。

犬は、縄文時代以来、人間に最も近しい動物である。しかし、その役割は狩猟用、愛玩用、食用と様々であり、野生種や野犬もいたと考えられる。そこで、この犬の性格についてもっと知ることはできないかと、骨格の鑑定を行ってもらった。



左側の上顎骨、下顎骨、脛骨（けいこつ）、橈骨（とうこつ）、右側の大腿骨が出土した。上顎骨、下顎骨に残る歯の生え具合、磨り減り具合から、成犬（おとなのイヌ）と考えられる。上腕骨および脛骨から推定される大きさは、中型犬サイズ（柴犬くらい）である。人為的に付けられた傷がないので、解体された個体ではない。

※食用にされたイヌは、中世以降、都市遺跡（草戸千軒、京都、江戸など）で多数出土しているが、そうした個体には、腱を切ったり肉を外し易くするために人が刃物を使った際に付くカットマークが残る。

（宮路淳子）

中世南都興福寺周辺ののどかな情景を思い浮かべた時、人々の身近にいた犬はどうしても愛玩用ではなかったかと想像が働くのである。

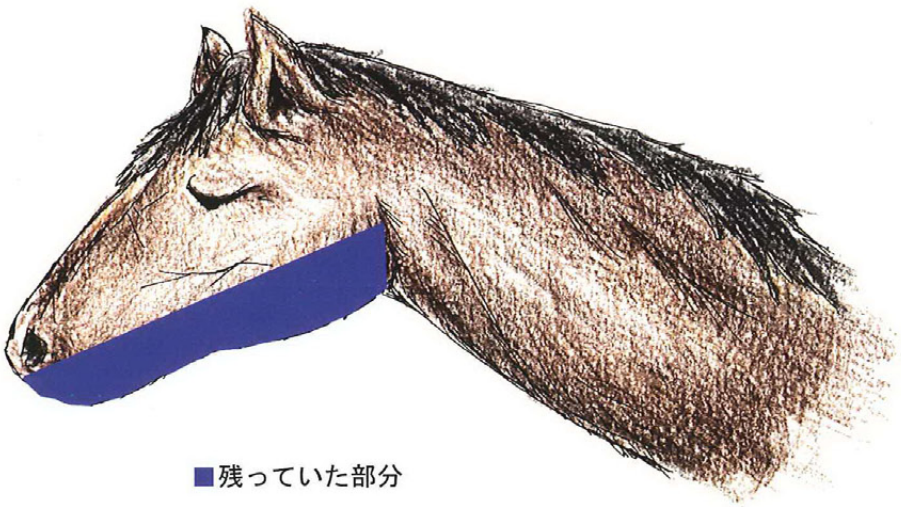
（中川朋香 作画）

地鎮のための馬の首

北小路町の寺院は、創建時に斜面や谷地形を埋め立てて、大規模な整地を行っている。これに先立って地鎮のまつりが行われたらしく、馬の首が埋め立てられていた。首は、東西２箇所の瓦堆積の中間地点の整地土中に、北北西向きに埋められていた。整地を行う途上で埋められていったと考えられ、骨格は下顎骨しか残っていなかったが、歯や骨の残存状態は良好である。

こういった地鎮は古代では多く知られているが、中世前期では珍しくなっている。南都のこの地で見られたことに何か意義があるのであろうか。

出土した馬の歯



■残っていた部分

（中川朋香　作画）

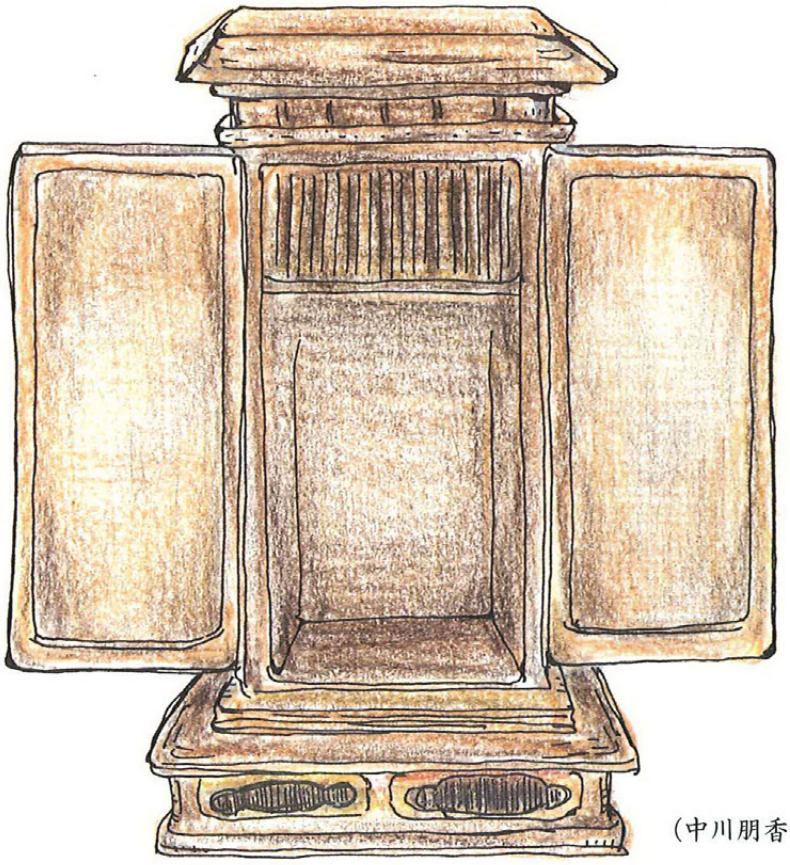
塼仏を礼拝

構内東北部（グラウンド東北隅）の佐保川に近い地点で1100㎡の発掘調査を行った。ここは上層では奈良奉行所の濠が確認されたところであるが、中世では 12 世紀後半の井戸が多く検出されている。

その井戸の一つから塼仏が出土した。

縦7.0cm、横4.7cm、厚さ0.9cmの長方形の粘土板に三尊像をレリーフさせている。中尊(像名不明)は後屏をもった台座に倚座し、頭の後ろには円光背、頭上には大蓋をいただいている。左右の脇侍は右手を下ろし、左手は水瓶の様なものを持つ。各々の頭上には飛天が配されているが、菩提樹は表現されていない。

この塼仏は、様式としては８世紀にさかのぼり、奈良時代のものに間違いない。しかし、出土したのは 12 世紀後半の井戸である。



（中川朋香 作画）

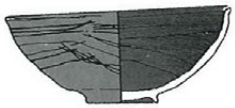
こういった事実から導き出される解釈のひとつとして、何らかの事情で伝えられた奈良時代の塼仏が、この地域に居住していた興福寺（あるいは宿院）関係者によって念持仏として礼拝されていたと考えるのはいかがであろう。

そして中世後期へ

前頁と同じ地点の調査で東西約 5.6m、南北約 5.3m、深さ 3m余りの不整円形の大きな土坑が検出された。埋められた時期は 14 世紀後半である。その形態からトイレの可能性が高いが、それらしい堆積はなく、使用されずに短期間に埋められたと考えられる。

これは 14 世紀（中世後期初頭）になると、中世前期（特に 13 世紀）に見られたようなトイレの設置が必要とされなくなったことを示している。都市生活を送るにあたっての新たな居住形態が採用されたことは想像に難くない。

トイレと考えられる大土坑



また、日常に使用される器においても、瓦器椀が 14 世紀に入ると突然見られなくなる。これはようやく漆器椀が普及してきたためであると説明されている。

屋敷地を囲む堀と土塁

構内遺跡では、このころ（14 世紀）に大規模な整地が行われ、小河川が埋められたり、場所によっては堀や土塁で囲まれた屋敷地が見られたりもする。そしてこれらは 15 世紀のいわゆる『大乗院寺社雑事記』の世界に続いていくわけであるが、いつか機会を改めて紹介することにしたい。

あとがき

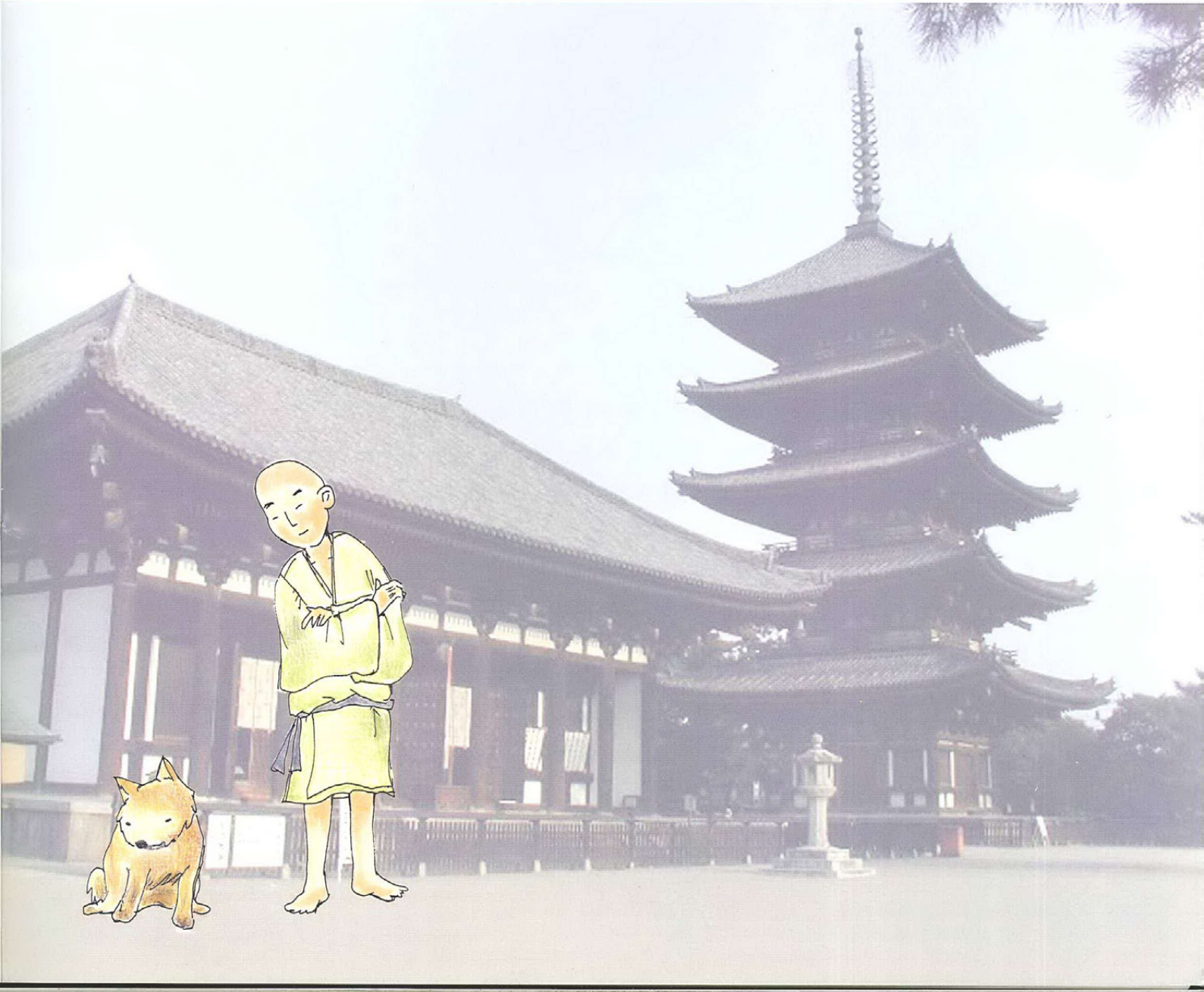
構内遺跡の遺構や遺物を通じて、中世前期の南都をひとわたり見てきた。焼討ちにより被害をこうむった南都は、興福寺を中心として復興された。それに伴ってうつりゆくこの地の人々の生活の様子を、部分的ながら明らかにし得た。

今後は、より「今に近い」中世後期の南都をテーマにして様々な検討を加えることが必要とされる。その機会が早くやってくることを願うものである。

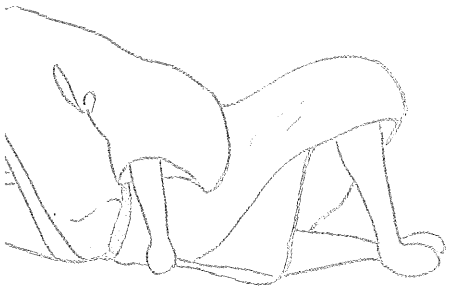
この図録を作成するにあたっては、実に多くの人々の協力を得た。パソコンを使用しての守田めぐみさん、瀧田雪江さんの編集作業、そして竹田光江さんの復原画や、中川朋香さんと六車美保さんによるイラストは、図録によりいっそうの彩りをそえてもらった。

また、木簡の解読には舘野和己氏、犬の骨については宮路淳子氏にご教示を賜った。その他にも多くの人に各専門に応じていろいろ助けてもらっている。この場を借りて御礼を申し上げたい。

（坪之内 徹）



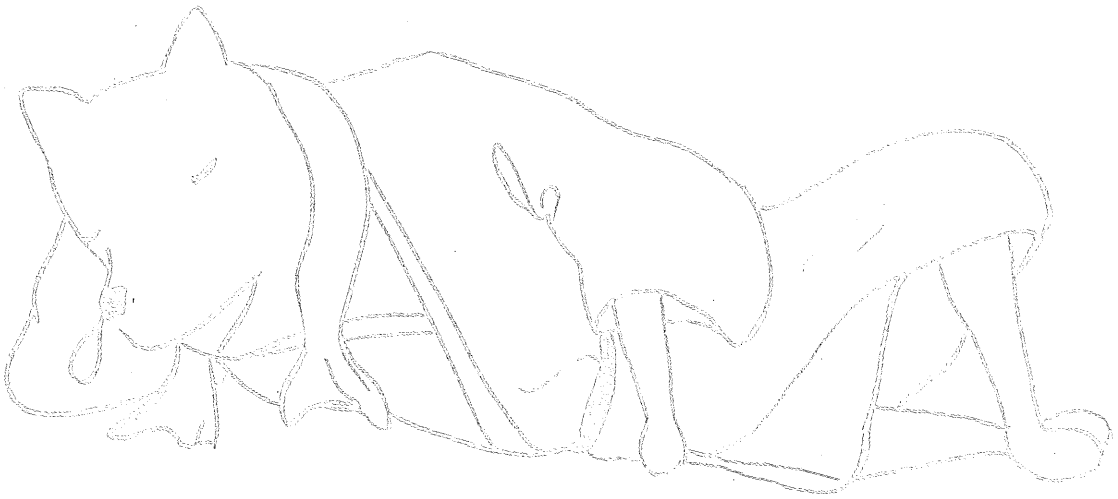
《参考文献》



奈良女子大学『奈良女子大学構内遺跡発掘調査概報』Ⅲ（1986 年）

奈良女子大学『奈良女子大学構内遺跡発掘調査概報』Ⅴ（1995 年）

奈良女子大学『奈良女子大学構内遺跡発掘調査概報』Ⅵ（1999 年）

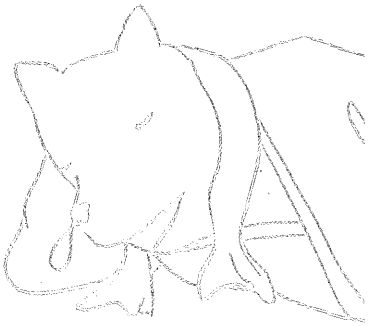


泉谷康夫『興福寺』（吉川弘文館，1997 年）

佐藤宗淳「佐保殿覚書」『奈良歴史通信』第 34 号（1990 年）

堀池春峰「奈良女子大学と佐保殿」『奈良県観光』309 号（奈良県観光新聞社，1982 年）

安田次郎「興福寺の雑役免庄園と院家領庄園について」（『お茶の水史学』33，1990 年）



昼寝をする中世人と中世漆器の文様
（六車美保 作画）

中世人の書

奈良の中世を考える（1）－平安・鎌倉－
平成20年3月31日 発行
編集 奈良女子大学埋蔵文化財発掘調査室
発行 奈良女子大学 施設企画課
（電話：0742-20-3223）
印刷 奈交サービス株式会社

中世人の顔